

紳士淑女、名誉来賓の皆様、このように素晴らしい皆様に演説する機会を光栄に思います。

IFRS 財団の評議員である Duck-koo Chung 氏と韓国公認会計士協会の会長である OuHyung Kwon 氏の開会の挨拶に感謝します。

また、Chungwoo Suh 氏のコメントに対しても感謝します。もちろん、Chungwoo 氏は IASB のメンバーとして新たに任命されていますので、彼の仕事は我々の組織のお世辞を言うことです！

IASB 議長に 9 か月前に就任してから、韓国を訪れるのは 2 度目、アジアを訪れるのは 5 度目になります。最近 6 か月間で、アメリカを含めた他のどの地域よりも何度もアジアを訪れています。我々のボードメンバーとシニアスタッフの多くにも当てはまると思います。

これは驚くことではありません。IASB は国際的な会計基準設定主体となる道をしっかりと歩んでいます。それは、我々が世界のあらゆる地域と同等に協議できることを意味しています。アジアは、世界で最も急速に成長している多くの経済圏にとっての本拠地であり、我々の基準があなた方の要求に合っていることを確かめる必要があります。

この作業に取り組むには様々な方法があります。

最初に、国レベルで、我々は韓国会計基準委員会 (KASB) や韓国公認会計士協会 (KICPA) のような現地組織と大変緊密に協力して作業をしています。この協力は IASB への Chungwoo Suh 氏の指名でさらに深まるでしょう。

第二に、我々はアジア・オセアニア基準設定主体グループ (AOSSG) と地域レベルで作業しており、全体としての地域の集団的見解を理解します。AOSSG はここ数年間活発に活動しており、IASB にとって大変役立つ相談役として機能しています。今年の後半に、IASB はロンドン以外で最初の事務所を開設します。事務所は、東京に位置し、十分な人員を備え、アジア・オセアニア地域全体のニーズに役立つでしょう。

第三に、我々は新興経済圏グループ (EEG) を設立しており、韓国がその設立メンバーとなっています。

EEG は IASB の国際活動ディレクターである Wayne Upton が指導しており、彼は今日私と一緒に来ています。これは大変重要なグループです。公正価値測定のような一定の

IFRS を適用する際に、EEG は新興経済圏が直面し得る課題を理解するために優れたフォーラムを提供します。全体として、韓国の関心は我々の組織の全てのレベルで十分に反映されています。

さて、それでは今日の議題へ移りましょう。ご存知のとおり、IASB は米国財務会計基準審議会（FASB）とのコンバージェンス計画の完了に近づいています。両審議会がこの方向を決めてから 10 年経ち、多くのことが達成されました。我々には、完了すべき 4 つのコンバージェンス・プロジェクト（リース、収益認識、金融商品及び保険会計）が残っています。

会計においては、短期はむしろ長期になり得ることを学びましたが、私は比較的早くにこの作業を完了できることを期待しています。

私は、SEC が米国の IFRS アドプションを適時に決定することで、残りのコンバージェンスを加速するのに役立つと考えています。言うまでもなく、私はその瞬間を楽しみにしています。

それでは、次は何でしょうか？ 次の数年間は IASB にとってどのように見えるでしょうか？ 我々の優先順位はどのようなものあり、我々は意のままに使える限られた資源をどのように使うべきでしょうか？

昨年あたりから、IASB も評議員会と同様、真剣にこれらの質問を考えています。

評議員会は最近戦略レビューを完了し、IASB は我々の将来の議題に関する最初の公開協議の完了に近づいています。

今日はその協議の可能性の高い結果に焦点を置きたいと思います。

IASB の将来の議題

2011 年には、我々はコメント募集のために、いくつかの考えを提示した協議文書を公表しましたが、さらに重要なことには、IASB の将来の議題に関するフィードバックを求めました。

並行して、審議会とスタッフは、多くの会議、円卓会議での議論、ウェブキャスト、その他のアウトリーチ活動を開催しています。この協議はまだ結論を出していませんが、見つけるのが簡単な共通のテーマがいくつかあります。

最も一般的なフィードバックは、安定した期間の要求です。我々がこれを得られるとは考えていませんが、安定した期間の要求は理解できます。10年前、IFRSを使用する経済圏はほとんどありませんでした。今や100か国超が使用しています。同時に、多くの我々の基準は書き換えられています。先例のない変化に富んだ10年間でした。世界中の我々の友人が、混乱がいつか収まって欲しいと願うのは驚くべきことではありません。

したがって、IASBの将来の作業計画の決定には、変更が必要とされる最も重要な分野をつまみ食いすることが含まれます。修繕が必要なところを修繕し、それ以上のことはやめましょう。

それでは、コンバージェンス後の作業計画にとってどのような意味があるのでしょうか。この分野の多くは、必然的に、コンサルテーションからのフィードバックに収まります。

第一に、我々の概念フレームワークの改訂を完了することは、ほぼ普遍的に支持されています。このフレームワークは、IASBの意思決定のための評価基準として機能します。選択肢が明確ではない場合、フレームワークは、IASBが基準間で首尾一貫した決定をすることを促すように機能します。フレームワークは、原則主義の基準を適用する時に、企業にとって重要な参照ともなります。

我々には十分に合理的なフレームワークが既にあります。しかしながら、測定のような分野は、控えめに言ってもまだ完全とは言えません。これが該当する理由を容易に理解できます。結局、測定は会計において最も判断を要し、困難で政治的な部分です。我々は、この分野をより厳格に、明瞭にする必要がありますが、多くの知力と勇気が要求される大変つらい作業となるでしょう。

第二に、関係者の多くが過重な開示負担に不満を言っています。これは、全て財務報告のせいではありません。

明白な事実、ビジネスがより複雑になっているということです。財務報告の仕事は、この複雑さを覆うのではなく、説明することです。

すべての開示が投資家に有用な情報を提供するわけではありません。標準化された決まり文句の回答は、投資家が何が起きているかを本当に理解するのに役立つというよりも、ボックスにチェックマークを付すようなものです。これは、作成者、監査人、規制当局、基準設定主体が共に対処しなければならない問題です。

我々にとっては、我々は開示規定が適切であることを確認する必要があります。ボトムアップ、すなわち、基準が最初に導入された時、個々の開示規定は合理的であったかもしれませんが。しかし、トップダウンの観点からは、全体として開示は財務報告の明瞭性を改善しますか。それとも、何が本当に起こっているか実際に確かめることを困難にしますか。

極めて有意義な最近の諮問会議で、この問題について予期しない意見の一致がありました。ほとんど誰もが、すぐに成功する方法は多くないことに同意しました。

ある投資家には開示が散乱していても、他の投資家にとっては情報の金塊です。情報を取り去ることは容易ではありません。それにもかかわらず、アジェンダ・コンサルテーションからのフィードバックは、多くの回答者、特に小規模の上場会社にとって、これが重要な分野であることを示しています。小規模の上場会社の多くは、過重な開示負担が双肩に不均衡にのしかかると考えています。

有難いことに、我々は最初から始めるものではありません。いくつかの優れた準備作業が世界中の多くの会計基準設定主体によって既に完了しています。我々は開示に対する我々のアプローチをレビューするため、この作業は役立ちます。

次に、我々はその他の包括利益（OCI）をどうするかを決定しなければなりません。誰もがそれをよりはっきりさせるように我々に要請しています。OCIの意味は何でしょうか？そこに何を入れるべきでしょうか？それはどのように純損益に関係するのでしょうか？我々はリサイクルを認めるべきでしょうか？

過去に、私はこの議題に関する多くの熱心な議論を目の当たりにしました。純損益の最大のファンは、しきりにできるだけ多くをOCIに入れたがっているという印象を受けました。

もちろん、OCIがやがて稼得利益へリサイクル可能であればということです。これらの審議の結果がどうなるかは、私には現時点で予測することはできません。現時点で私ができるのは、純損益とOCIを並列することはしばしば非生産的に見えるということです。

OCIを、望ましくは注記に埋め込むべき、概して不適切な数字と見なすことが正しいとは思いません。確かに、OCIは純損益よりも明白な性質を有するものではないことがよくあります。

しかし、このことが OCI を無意味にするわけではありません。特に、貸借対照表が大規模な金融機関にとって、OCI は非常に重要な情報を含んでいる可能性があります。OCI は貸借対照表の質を示唆する可能性があります。

たとえ実現していなくても、どのような利得又は損失が貸借対照表にあるのかを知ることは、投資家にとって大変重要です。OCI は資産と負債の期間のミスマッチについて情報を与えることができます。利子率の変動に対する感応度を示すことができます。

貸借対照表の変動を抑制することは金融機関の経営者の中核業務であるため、OCI は確かに、大変重要な業績指標であり得ます。

OCI の明確な概念上の定義を規定する間、我々はリサイクリングの難題に取り組まなければならないでしょう。世界中には多くのリサイクリング支持者がいます。OCI をリサイクルする主な主張は、確かに純損益総額が最終的にはキャッシュフロー総額と等しくなるということです。

これは、とても力強い主張です。それにもかかわらず、IASB は、リサイクリングに熱心になったことはありません。我々が気の進まない主な理由の一つは、利得と損失を実現させるタイミングに関する利益操作の余地です。そのため、投資家は、リサイクリングが許容される場合、リサイクリング前の純損益を見ることを頻繁に要求するのです。投資家は、リサイクリングに企業の真の業績を不透明にする可能性があることを知っています。

私は、これから数年の内に、我々がこの議題に関して興味深く、熾烈な議論を多く行うと確信しています。

私はこの議題にとっても関心があり、このプロジェクトの作業が始まることをとても楽しみにしています。我々が OCI のより確固とした理論的基礎を生み出すことに成功するならば、業績指標として投資家に対する有用性が促進されると確信しています。

この「大きなテーマ」はさておき、農業、共通支配下の企業結合、超インフレ、料金規制産業のような、より小さなプロジェクトを取り上げましょう。

我々はどこかで線引きしなければなりません。最近の数年間の経験により、我々は一度に余りに多くのことを試みようとした危機的状況を思い出さなければなりません。同時に、我々は世界の異なる地域で問題を引き起こしている論点を 3 年間単純に中止することはで

きません。例えば、私は、韓国がIASBに外貨換算に関する基準を更新することを要望していることをよく知っています。

なぜなら、我々は、IASBのテクニカル活動担当シニアディレクターのAlan Teixeiraの指揮下で、作業プログラムに新たに「調査研究フェーズ」を入れることを決定したからです。我々の議題の調査研究フェーズは、IASBの作業プログラムの候補と見なす前に、プロジェクトを「生み出す」場所になるでしょう。

しかしながら、我々はキャノンストリート30番地にIFRS大学を設立する計画はありません。我々はそうするための手段も熱意も持ち合わせていません。我々ができることは調査研究作業のパラメーターを定義することですが、我々は、調査研究を行い、研究結果を報告するために我々と作業するように、他の会計基準設定主体に勧めます。

外貨換算はIASBの調査研究の議題になるかもしれないプロジェクトの良い例です。KASBはこのトピックに関する優れた調査研究をEEGと同様、既に行っています。ところが、我々がこのプロジェクトをどのように進めるべきかについて見解が混在することも知っています。

我々は、KASBと他団体がIASBの調査研究アジェンダの主導の下で、この調査研究をさらに開発することに関心を向けるでしょう。実際には、基準設定作業のディスカッション・ペーパー段階の間、我々は通常行われる「重労働」をKASBに依頼させて戴きます。それによって、我々は、国と産業の見解を当該過程の早い段階に理解できます。

同様に、プロジェクトがIASBの作業プログラムに移動するものの、審議会に過度の負担がかからない方法ならば、これは新しいIFRSを開発する時間を減らします。

IASBが設定したパラメーター内で、他の会計基準設定主体が果たす調査研究フェーズを我々の作業に導入することは、KASBのような他の組織との関係を正式化し、かつ強化するという我々の要望の優れた例です。

結び

ご列席の皆様、ご清聴感謝します。我々にはしなければならない重要な仕事があり、あなた方の支援は我々にとって非常に重要です。

お時間を頂き、ありがとうございました。会議が成功することを祈っています。